

Reading の授業における小説の 文体論的読みの意義を考える

——テネシー・ウィリアムズの短篇「最も大切なこと」を例にして*——

矢 口 はるみ**

(1996年5月9日受理)

筆者は以前、英文の小説を教室で読む際に、文体論的アプローチを適用すれば、単なる印象批評を超えた作品の鑑賞が可能になるのではないかということを、Alice Walker の短篇を実例として論じてみた。¹ 今回の小論では、英語英文専攻の学科目の一つである Reading が、英語教育のカリキュラムにおいてどのように位置付けられるかを検討しながら、文学作品（主に小説）を Reading のクラスで読む場合の意義を考察し、加えて、実際に使用した Tennessee Williams の短篇小説を文体論的に分析することとする。

1. 学科目としての Reading における文学作品と文体論の関係

1. 「英語」と「英文学研究」と文体論

H.G. Widdowson の *Stylistics and the Teaching of Literature* は出版後10年以上を経て1989年に、『文体論から文学へ—英語教育の方法』として邦訳が出され、二人の訳者はその〈あとがき〉の中で、文学作品を英語教育の現場で用いることの是非や利用法についての議論が不十分な日本の現状の中で、この書が示唆に富むものであると述べている(田中, 田口198)。ここで言う英語教育の現場とは文学作品の研究そのものを対象としない学科目の授業を指すことは明らかであり、この小論で扱う Reading もその現場に該当すると思われるので、まず Widdowson の主張を簡単にまとめることから始めたい。

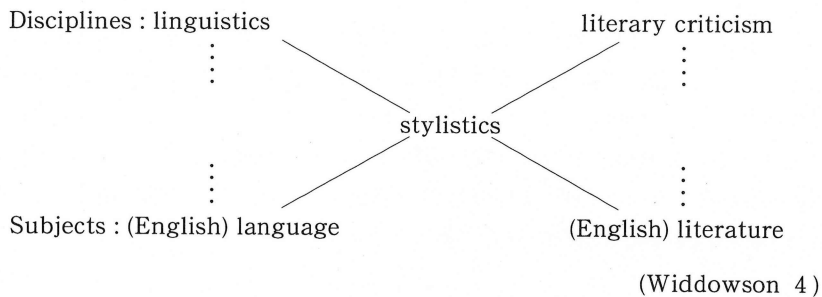
文体の分析が学科目としての「文学」にどう関わるのかを論じるのが主眼であるという彼は、イギリスの中等教育の中で文学作品がある種の情報源とみなされていることを鋭く批判する。つまり、『オリバー・トウィスト』を読んでヴィクトリア朝について何がわかるか、といった質問から成立している授業に象徴されるように、「文学」の授業は文学作品そのものを対象とせず、文化的、歴史的、あるいは社会的な文献等々と同様に文学作品を扱っているというのである。そして、文学作品を形成している言語は、我々が日常用いているものと同じであると共に、その使用の仕方が日常性から逸脱しているという事実を見据えて、文学作品の言述 (discourse)

* Evaluating the Application of Stylistics to the Reading of Fiction in the Foreign Language Classroom——with an example of T. Williams' "The Important Thing"

** Harumi YAGUCHI, the Course of English Language & Literature

そのものを読むことこそ、文学研究の基本姿勢ではないかと説く。具体的に Widdowson は、日常性からの逸脱については詩を中心に例証しているが、小説に関しても、例えば先行する指示対象を持たない三人称代名詞の he や she を挙げて、それらが短篇小説の冒頭部分にかなり登場し、読者を直接虚構の世界へ引き込む効果を生み出していることなどを指摘している。

彼の主張は一言で言うと、学科目としての「文学」は第一義的には言語学的な学科として定義できるということである。しかし、ここで重要なことは、彼が、文体論は独立した一つの学問や学科目ではなく、学問分野と学科目を、又学科目の中では「英語」と「英文学」を結び付けるものであるという観点から論述を進めて行ったということである。彼は文体論の位置を次の図式で示している。



学問分野と学科目の中間に位置付けられているためであろうか、我が国にも「現場の英語の授業に対して文学がどのような役割を果たせるか、という教育的見地から書かれた書」として紹介されたのにも拘らず、文体論的アプローチは、今なお日本の教育現場において、十分な評価を得ていないように思われる。² Widdowson は又、海外で英語の文学作品が読まれる場合は、外国語として読まれるのであるから、まず言語としての側面から文学作品が扱われるのが当然であるとは述べているものの (80)、外国語教育の中における「英語」「英文学」という二つの学科目と関連させて文体論がいかに適用されるかには、さほど詳しく論及していない。外国語教育における「英語」と文体論について、次に検討を加えなくてはならないだろう。

2. 学科目の Reading と文体論

さて上の図を英語英文専攻の現行カリキュラムに当てはめると、学科目についてはほぼ Reading と英米文学研究への置換が可能であろう。しかしここですぐに問題になるのは、Reading の授業で文学作品を扱う場合に、英語の文体についての考察や分析を行うのは、かなり困難な作業ではないかということである。しかし実際には、母国語で書かれた作品を読む場合とは異って、言語構造を異にする外国語である英語の作品を前にすると、我々の関心は自然と言語そのものに向けられ、内容理解のためにも文法的分析を行うのだということを、ここで再認識する必要があると思われる。³

Widdowson と同様に、「英語」と「英文学研究」の峻別はしていないものの、Short と Candlin は、外国語として文学作品を読む場合に文体論的なアプローチがいかに有効であるかを次のように説明している。

...foreign students have learned how to analyse sentences grammatically.... They are thus often more consciously aware of linguistic structure and better equipped to analyse it and its relationship to meaning than, say, today's average native-speaking undergraduate student of English. (93, 下線筆者)

余りに自明のことだが、言語そのものの有様を文脈の中において考察するという文体論的アプローチは、原作を読む行為と表裏一体をなしているという事を確認するために、青木、斎藤訳、ジョナサン・レイバン著、『現代小説の方法』から一例を挙げてみよう。この第3章は「文体と言語」の関係を論じていて、マーガレット・ドラブルの『黄金のイエルサレム』からの引用文の訳「彼女はイギリスに戻ったとき、何が待ちうけていようと、また、将来どんなことが起ころうとかまうものかと思った」(211)に続いて、レイバンの「ドラブルが心理描写を行う際に従属節を好んで使用した」という説明が加えられている。しかし、ドラブルの原文が添えられていないので、この説明は全く説得力を欠いてしまっているのである。

3. 学科目の Reading における文学教材の果たす役割

ここまで筆者は Reading の授業に文学作品を使用することの意味については触れずに論を進めて来たが、この辺でこの根本的な問題について考えねばなるまい。学生時代に英米文学を専攻した教員は、ごく自然に文学作品を Reading の教材にする傾向は強いのであるが、⁴ 実際に使える英語、いわゆる communicative English の力を養うためには文学作品は不適ではないかという見方が近年主流になっているのではないだろうか。⁵ それに対して、文学作品を材料として語彙を豊かにしたり、内容理解の能力を高めたりすることの意義を説いたり、文学作品を言語能力 (language competence) の養成のために利用することを提唱するのも、確かに必要だろう。⁶ しかし、論理的に構成されてパラグラフの展開も把握しやすい論説文を読むことで言語能力は十分に強化できるとも考えられるのであり、文学作品でなくては果せない役割についての考察を行わなくてはなるまい。ここでは一度、外国語という枠から離れて文学そのものの読みとは何か、どのような特質を備えているのかを、主に小説についてテキストと読者の関係を軸に論じている Iser の代表的著書、*The Act of Reading* を手掛りに探ってみよう。

Iser によれば、文学作品のテキストは現実には存在しないもの (objects) で成立しており、そのために “they [fictional texts] cannot have the total determinacy of real objects, and, indeed it is the elements of indeterminacy that enable the text to ‘communicate’ with the reader,....” (24, 下線筆者) なのである。読者はテキストから得た不確定な情報を次々と修正、あるいは統合し、語られていないものを読みとろうとする。⁷ つまり、読者は作品から与えられるメッセージを受動的に待ち構えているのみでなく、自らもテキストに働きかけるという相互活動 (interaction) がここでは見られるのである。登場人物や語り手達の言葉を聞きながら、自らの視点からもテキスト全体を眺めてゆく過程こそ、文学作品に特徴的な読みと言えよう。

もちろん、読者にとって既知の題材や、現実存在する人物を彷彿とさせるような登場人物も現われるが、それらも瞬時にして虚構性を帯び、非日常的なものへと変質してしまう。⁸ Iser の言うように、小説を読み終えてからその映画化された作品を観て、幻滅感を味わうことが多

いのも、読みの過程で形成されるこの虚構の世界の人物像や背景、事件といったすべてのものが、現実の枠組を超えて無定形であるからに他ならないのである (138)。

このように、想像力を働かせる流動的な読み方こそ文学作品が読者に要請するものだとしたら、少なくとも、思考の流れを一時的にせよ停止させてしまう様な、パラグラフ単位の内容理解に関する正誤問題などの言語学習を中心とした授業は、文学作品の読みにはそれ程適しているとは思われないのである。広義の言語学習、すなわち、言語能力よりもむしろ文学的な能力 (literary competence) を養うために小説を原書で読む時に、文脈の中でいかに言語が非日常的な様相を呈しているかに着目して語学的分析を行う文体論は、最も効果を発揮するのではないだろうか。⁹

II. テネシー・ウィリアムズの「大切なこと」についての文体論的考察

1. 視点の変化と内面描写

Forster も述べているように、視点を自由に移動させ、登場人物達の心の裡を映し出すことは、小説に許された特権であり、Dickens や Tolstoy もよく使った手法でもある。現実の世界では、自らの思いは意識できたとしても、他人のそれは推測するしかなく、ましてやそれらの思いが言語化されて発話となったり、文字として表わされることはない。小説の世界では語り手や登場人物達が、自在にこれらの見えない世界を表現することができるのであり、虚構の世界では潜在意識までもが暴き出されてしまうのである。¹⁰

しかし、独白形式は別にして、内面の思いを描写する際に頻繁に用いられる、いわゆる描出話法においては、視点の移動という現象が伴うことによって「一体誰の思いなのか」ということが曖昧になる。我々読者は、文脈の中でそれを判断しなければならないし、時には、単なる思考か、あるいは実際に発話されたのかの識別さえも文脈に頼る以外にないのである (Fowler 131)。語り手や登場人物達の発話や思考、そして視点が、どのように関連し合っているかを分析することは、小説の解釈上大変重要な意味をもつのであり (Leech & Short 350)、小説を鑑賞するためには不可欠な作業でもあろう。この小論の後半は、1995年度に Reading 2 で使用した短篇小説の文体論的考察から、それらの相互作用を調べてみることにする。

尚、教室では、山名章二編注、*Portrait of a Girl in Glass and Other Stories* (郁文堂、1992) に収められたものを使ったが、ここでは、下記のテキストにより原文の引用を行う。

Tennessee Williams, "The Important Thing", in *Tennessee Williams Collected Stories* (N. Y.: New Directions paper back, 1994), pp.163—174.

2. 描出話法あるいは Free Indirect Thought

テキストの具体的な分析に入る前に、内面を描き出す手法に関して、いわゆる伝統文法の枠内ではどのような説明がなされているのかを、村田勇三郎、『文(Ⅱ)』の「V. 話法」からまとめてみよう。

実際の小説では、「どう言われたか」を伝える時に有力な直接話法と、「何を言ったのか」という情報に重点が置かれて、当然伝達者自身の解釈の介入が見られる間接話法の混合した中間

話法がかなり見られることを指摘した村田は、例文の一つとして *Would she be late, she wondered* (136) という文を挙げている。そして、中間話法の被伝達部が伝達部から離れ、文脈の助けを借りて独立した形式の文として成立すると、それがいわゆる心理描写に用いられる描出話法であると定義している。¹¹

その形態的特徴としては、1. 伝達部を欠き、引用符はない、2. 疑問文、命令文、感嘆文の構造や語順、及び省略記号がそのままの形で保持され、疑問符や感嘆符も残る、3. 間投詞や *yes, no* も保持し、4. 人称代名詞と時制は、原則として間接話法に準じて変化する（ただし、時と場所の副詞、指示詞は除く）ことを挙げ、特に4番目の特徴によって描出話法であることを理解するのだと指摘しながらも、目立った文の構造上の変化がないままに地の文にいきなり登場人物の発言や心理が描写されるので文脈によって見分ける必要があると言及している。（ある人物の “*What shall I do?*” という心理を述べる場合には、次の三通りの表現が可能としている。A. 直接話法： “*What to do now?*” *she thought.* B. 間接話法： *She wondered what she should do.* C. 描出話法： *What on earth should she do now?*）

前述の Fowler の指摘 (131) にも見られたように、「発言」か「心理」かの区別も文脈に依るのであるが、Leech と Short はこの二つの表現形式を、作者や語り手の介入の度合いと関連させて、各々別々に分類している。文例と共に記された5つの思考描写 (Thought Presentation) からまず見てみよう。

1. *Does she still love me?* (Free Direct Thought : FDT)
2. *He wondered, ‘Does she still love me?’* (Direct Thought : DT)
3. *Did she still love him?* (Free Indirect Thought : FIT)
4. *He wondered if she still loved him.* (Indirect Thought : IT)
5. *He wondered about her love for him.* (Narrative Report of a Thought Act : NRTA)

(337, 例文の前の番号は筆者)

いわゆる描出話法（上述村田によるCの例）は、3のFITに該当するのであり、思考は一般的には言葉によって組み立てられないが故に、間接的に描写されたITが標準的な表現形式と規定するLeechらは、FITが、作者や語り手の解釈に拘束されずに登場人物の心の中により深く立ち入って行く形式であることを、次の図式で明らかにしている。

Thought presentation : NRTA IT FIT DT FDT

↑
Norm

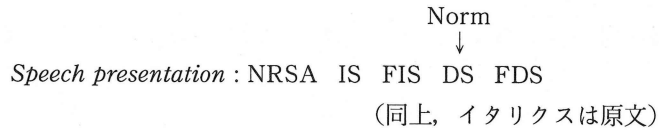
(344, イタリクスは原文)

これに対して発話の描写も、上記の1～5を対応した形として次の1'～5'が成立する。

- 1' = Free Direct Speech (FDS)
- 2' = Direct Speech (DS)
- 3' = Free Indirect Speech (FIS)
- 4' = Indirect Speech (IS)
- 5' = Narrative Report of Speech Acts (NRSA)

3'のFISは形態上は3のFITと同じであっても（3の*Did she still love him?*は発声され

は3'となる), 発話においてはごく自然な形の DS が標準とされるので, より作者や語り手の支配を受けることになるということを, Leech は前述の Thought presentation の図式の上段に記した次の図によって示している。



視点の変化と共に思考の描写を分析しようとする筆者にとって, この Leech らの分類法は, より有効だと思われるので, これらの略記号を使用して Williams の作品を考察してゆくことにする。

3. “The Important Thing” における視点と思考描写

(a) 大学生の John は, 春に大学が主催したダンスパーティーの会場でパートナーとして Flora という女子学生を紹介されるが, 社交的ではない二人は会場を抜け出してしまう。構内の礼拝堂に入り, 各々の宗教観や人生観を語り合う二人は, やがて書くことに関心があるという点で意気投合する。Flora は, 自分にとって書くことは自己表現そのものであると言う。

...she went on, “It’s such a waste of time to do things over and get the cadence and always just the right word. I’d rather just scramble through one thing and then rush into another, until I have said everthing I have to say!”

How extraordinary it was that she and John should feel exactly the same way about this! He confessed that he was himself a writer and that two or three of his stories were coming out in the University’s literary magazine—and when Flora heard this she was almost absurdly moved. (165, 下線と省略記号…は筆者。尚以後, 原文引用の下線は筆者)

下線部は, 感嘆符や指示代名詞 this を保持し語り手の判断の気持を反映している should を伴っていることや, 次の「彼は打ち明けた」という文に自然につながるためにも, John の思考と解釈するのがよいと思われる。しかし原文は How extraordinary it was that she and he …! となっていないで, John という固有名詞を残しているの, 読者は三人称の語り手からの視点を混合していることを意識せざるを得ないと言えよう。

(b) に続く場面では, 周囲の人々の行動や考えとは常にちぐはぐして人間関係がうまくゆかない, と話す Flora に同感する John に対し, Flora が語気を強めて次の様に話す。

She looked up at John. “You’ll have the same trouble!” she told him. “We’ll never be happy but we’ll have lots of excitement and if we hold on to our personal integrity everything won’t be lost!”

He wasn’t quite sure what Flora was talking about, and personal integrity seemed the

(NRTA)

vaguest of terms. Was it something like what she meant by “honest” writing?

“Yes, something,” said Flora, “but ever so much more difficult, because writing is ideal
(DS) reality and living is not ideal...” (FIS) (166)

下線部は文脈から考えると、前に語り手による John の心理描写があるので (FIT) とも理解できるのだが、後に来る Flora のせりふからは John の実際の発話と解釈の方が自然であろう。

(c) 「人生にとって大切なものは何かを見つけるために生きている」という Flora のせりふで一回目の二人の出会いの場面は終わり、それに続く新しいパラグラフでは John の回想とも呼べる部分が描かれる。

John didn't see her again that spring. Final examinations came soon after the dance, and besides he was not altogether sure that she was the sort he would get along with. she was not good-looking and her intensity which was so charming while he was with her seemed afterwards a little—fantastic! (narrative) (NRTA) (FIT) (166-67)

普通の地の語り文 (narrative) から始まり、次第に主人公の意識の中へ侵入してゆく手法がここでは自然に見てとれる。

(d) 秋になって、自分の通っている州立大学へ編入して来た Flora と偶然に大学構内で出会った John は、昼食も忘れて彼女と人生を語り合う。女子学生のクラブ (sorority) にも加入せず、妥協や順応といったことのできない性格が悩みであると告げられると、共感した John は自分が今執筆中である一幕ものの劇について息堰切って話し出す。象徴に満ちている自分の作品は説明しにくいのだという彼に対して Flora は次のような反応を示す。

But Flora nodded her head with quick, eager jerks and supplied words wherever he stumbled. She seemed to know intuitively what he was trying to say.

“Oh, I think that's marvelous!” she kept repeating.

He was thinking of submitting it to the one-act play contest. His roommate had urged him to do so. (FIS)

“My goodness, why don't you!” exclaimed Flora. (167-68)

下線部分も次に来る Flora のせりふから、John の実際の発話を語り手が介入した形で描写したと解釈するのが自然と考えられる。

(e) 同じ大学に在学するようになった二人は、共通の趣味を持つ証拠に同じクラブ (文芸雑誌、詩、フランス語) に所属し、政治的にも、学生を拘束しようとする学校当局に対抗してパンフレットを印刷するなどの行動を共にする。二人は当然親密になるのだが、まだお互いに本当に気を許せてくつろげる状態にまでは関係が深まっていない。John は何か大切な事が二人の間に起こりそうな予感がする。

John always had the feeling that something very important was going to happen between them. ... When he was with her he felt the kind of suppressed excitement a scientist might feel upon the verge of an important discovery. A constant expectation or suspense. Was Flora conscious of the same thing? Sometimes he felt sure that she was. ^(FIT) But her enthusiasm was so diffuse that he could never be sure. (168, 省略記号は筆者)

この部分では、feel の連続使用によって、語り手が John の感情や思考を知り尽くしていることが示されているが、下線部によって読者は、語り手の支配からわずかに逃れて John の内心を覗くことができるのである。

(f) John に対して率直に何でも語ってくれる Flora も、どこ出身であるかと尋ねられると頑に答えない。ある日彼は、彼女から借りた詩集の中に挟まれた手紙を見つける。

The envelope was postmarked from Hardwood, Kansas. John grinned. It was a hick town in the northwestern part of the state and probably the deadest spot on earth...

^(narrative) ~ ^(FIT) Despising himself for doing so, he opened the letter and read it. It was from Flora's mother and was a classic of its kind. It complained of the money Flora was having to spend on board and books, urged her to spend less time writing nonsense and buckle down to hard work so that she could get a teaching job when she got through with her schooling because times were getting to be very bad...

"The ground and the people and the buisiness and everything else is dried up around here," wrote the mother. ^(DS) (169-70)

最初の下線部はただの地の文の様に見えるが、文末の省略記号によって、John の視覚を通して彼の脳裡に浮んだ思いであることがわかる。又、二番目の下線部は手紙の内容の要約の様に見えるが、やはり文末の省略記号と次に続いて現れる (DS) 表記の手紙の文面との比較によって、John 思考にも重なっていることが示唆されていると言えるであろう。各々の下線部の前にある grinned や read という語が視点の緩やかな移動を導いてもいる。

(g) 春が巡って来ると John は中古の車を買ひ、授業のない午後にはいつも Flora と郊外にドライブに出かけるようになるが、彼女には未だ人間関係を円滑にしようという態度は見られない。学内の他の女子学生と比べてもどうも変っているという意識は John から離れない。

Other girls on the campus, he could look at and imagine in the future, settled down into average middle—class life, becoming teacher or entering other professions. But when he looked at Flora he could not see her future, he could not imagine her becoming or doing any known thing, She did not fit happily or comfortably into the university cosmos but in what other place or circumstances—he asked himself—could she have found any refuge whatsoever? Perhaps he was no more like other people than she was, but his case was different, Come up against a barrier, he was of a nature to look for a way around

it. But Flora— (170, 省略記号…は筆者)

下線部の前半は、he asked himself という文が挿入されているので、いわゆる中間話法であると解釈できる。パラグラフの最初の文から重ねて使われている imagine という語の存在も、John の意識の中に語り手が侵入しやすい状況を作り出していると言えよう。後半の Perhaps で始まる部分は、最後の But Flora—という省略文によってほぼ John の思考そのものであることが示されており、視点の移動も無理のない形となっている。(そもそもパラグラフの最初の地の文からして、三人称の語りという形式をとりながら語り手と John の思考は同化しているとも言えるのであるが)

(h) 春の学期末に二人は、フランス語の試験の準備も兼ねて昔の採石場（地質学に興味を持っている Flora のお気に入りの場所）でデートをすることになる。“Lover's Leap” と呼ばれている草の茂った丘の上で勉強を始めるが、持参した赤ワインを飲んだ John は Flora にバックスと呼ばれろとすぐに、「服を脱いでニンフになれば、白樺の木立の中を追いかける」などと冗談を言い大声で笑い出してしまふ。

The idea pleased John very much. He laughed loudly. But Flora was embarrassed. She cleared her throat and held the notebook in front of her face, but he could see by the base of her throat that She was blushing. He stopped laughing, feeling somewhat embarrassed himself. He knew what she was thinking. She was thinking what might happen if he could catch her among the birth trees with all her clothes off... (172)

下線部の前の文章で語り手は、John が Flora の考えを見抜いていたと述べ、語り手から John そして Flora へと視点が移動してゆく様子が下線部に見てとれる。一見三人称の語りに思えるこの部分も、末尾の省略記号によって John の思考そのものにより近づいた描写であることを示していると言えよう。

(i)もう一杯ワインを飲み体も暖まり、気分も良くなった John は、体内に新しい命が宿ったことに気付く。彼はもはや Flora がノートから読み上げるフランス語についての質問には耳を傾けてはいない。ほろ酔い加減の彼は、ひたすら Flora を凝視し、彼女がそれ程美しくはないことに気付き、小学校時代の友達に似ていることを回想するのであるが、その場面はパラグラフ全体が自然に語り手の意識から John の意識に移行している。

He noticed that she was not very pretty. ... Reminded him of an undersized child he once knew in grammar school. For some reason they called him Peekie and threw rocks at him after school. A timid, ridiculous creature with a high, squeaky voice that everyone mocked. ...She was like that. A queer person. ... There was something about her that he wanted to set his hands on in a rough way—twist and pull and tease! Her skin was the most attractive thing about her. It was very fine and smooth and white...

(172—73, 省略記号…は最後のみ原書)

最初の文中の notice, 又少し後に現れる remind という動詞が John の意識の中へと読者を

導き、省略記号や感嘆符の使用を伴って、まだ Flora に触れたことのない John が彼女の素肌に誘惑を感じている有様が、見事に描出されていると言えるだろう。

(j) 上記の場面の次のパラグラフでは、John が Flora の素足を風のそよぎの瞬間に目にしてしまう部分が三人称で語られる。二人は丁度二匹の獣のように組み討ち状態で草の上をころげまわり、抵抗した Flora のために John は傷だらけになり、Flora は蹴られたために腹部を押え、ついに疲れ果てて横たわるのである。

それに続くパラグラフでは対照的に John の思いが描写されているので見てみよう。

John got up to his feet and stood silently staring at the angry afterglow. A way off to the left was the university town, beginning to emerge through its leafy clouds with the sparkling animation of a Saturday night in late spring. There would be many gay parties and dances that night. Girls in dresses that seemed to be woven of flowers would whirl about polished dance floors and couples would whisper and laugh behind clumps of ghostly spirea. These were the natural celebrations of youth. He and this girl had been searching for something else. What was it? Again and again later on the search would be made, ...—and perhaps every time a repetition of this, violence and ugliness of desire turned to rage...

He spoke aloud to himself. “We didn’t have anything—we were fooling ourselves.”

(173—74, 省略記号は下線部のみ原書)

第一パラグラフの最初の文は、語り手による John 動作の外側からの描写であるが、既にここで stare という動詞が John の眼差しに同化する描写が続くことを示唆している。(彼の見つめている「夕焼け」に angry という感情表現の形容詞が付けられていることも見逃せない。) 大学町を眺めているのは、語り手でもあり John でもある。下線部の最初の文では that が night に付けられているが、次第に these, this, 疑問符、省略記号などが現われて、John の青春に対する苦々しい思いが、彼自身の内部の視点に近い位置から描写されていることが理解できる場面である。第二パラグラフで「一人言を声に出して言った」とあることで、下線部が発話行為には到らない John の思考であることが、文脈上からも類推できるとも言えよう。

(k) 上記引用の直後、まだ汗と草にまみれ喘ぎながら草地に腰をおろしている Flora を振り返る John は、女性という性 (gender) からは程遠い Flora の姿を発見する。

1.He wondered that he had never noticed before how anonymous was her gender, for this was the very central fact of her nature. 2.She belonged nowhere, she fitted in no place at all, she had no home, no shell, no place of comfort or refuge, she was a fugitive with no place to run to. 3.Others in her position might make some adjustment. 4.The best of whatever is offered, however not right. 5.But Flora would not accept it, none of the ways and means. 6.The most imperfect part of her was the most pure. 7.And that meant—

“Flora...”

(174, 文頭の数字は筆者)

1 は (NRTA) とみなせるだろうが、下線部 this によって “I wonder I’ve never..., for this is

the very central fact of her nature”に近い形になっている。2から John の視点に同化して (FIT) が続いて用いられるが、3の might make 以下に構文上連なる4の文は下線部 is の存在によって、テキスト中唯一の (FDT) であることが判明する。(FDT) はⅡの2の図式で示したように、思考描写の形態としては標準からは最も離れており、登場人物の心理が直接伝達されるという特徴を備えている。そのために Leech らが言うような「登場人物が何かに目覚めたことを知らせる」ことができる効果をここで読みとることもできるであろう (343)。John はここで、無器用ではあるけれど他の大方の女性達のように世の中に馴れてしまうということを拒否する Flora の姿を認識したのではないだろうか。5～7では再び (FIT) が用いられているであろうことは、次に来る「フローラ」という John の (DS) によって推測される。

以上(a)～(k)まで、地の文と交錯していると思われる思考描写の部分を抜き出して、文脈の中で考察してみたが、引用文中には動作動詞や look, stare などの感動動詞と共に、feel (sure), know, などの心理状態や精神活動を表現する語が三人称の語り手による文中に散見されたことを、ここで想起する必要があるだろう。これらは、語り手が主人公の内面からの描写を行っている証し (Uspensky 85) でもあり、微妙な視点の変化を容易にしていると考えられるからである。

(k)の場面の直後、John がフローラに手を差しのべると、彼の眼に「自分を理解してくれた」ことを読みとった彼女は彼の手をとり、二人は身を寄せる。結部のパラグラフは三人称の語り手の描写に戻るが、文末尾に加えられた省略記号のために、語り手、John, そして Flora の意識が一つに溶けあう世界がそこに残される。動作動詞による外側からの描写から、お互いの眼差しを通しての感情移入が起り、遂には相互理解に到る過程が見事に描かれていると言えるだろう。

For the first time they stood together in the dark without any fear of each other, their hands loosely clasped and returning each other's look with sorrowful understanding, unable to help each other except through knowing, each completely separate and alone —but no longer strangers... (174)

<おわりに>—高校での英語読解指導との関係をふまえて

塩澤と駒場が「英語ⅡB」のテキストについての調査を通して、内容理解の読みの指導をするためには読みのスキルを中心に据えたテキストが必要であり、従来行われてきた訳読式の授業に頼らない教授法もとり入れるべきだと提案したのは、1990年であった。筆者は、科目名が「Reading」になったのを契機にテキスト内容がどのように変化したかを、無作為に選んだ11冊で調べた結果、メインテーマなどパラグラフの仕組や種々の Reading Strategy についての説明を取り入れているものがほぼ半数にのぼることや、訳読式を超えた読解能力を育てる為に工夫された Exercise が数多く取り入れられていることがわかった。又扱われている素材は論説文が多く、小説などのフィクションはほとんどが改作されて主要な Lesson とは別に、Fast (Rapid) Reading や Supplementary Reading の枠内で論説文同様に英問英答などを中心とす

る Exercise を伴っているという特徴が見られた。¹²

この事実からも、高校の読解指導の延長として、文学作品を原書で読む事の意義（そしてその際には必ず文体を意識せざるを得ない）が理解されるであろう。塩澤らがテキスト作成の際に考慮すべきだと主張しているリーダビリティでは、作品全体の構成や抽象度、パラグラフの結束性（cohesiveness）、さらには作品の比喩や詩的な面からの難易度の測定は出来ないのであり（清川31）、文学性（literariness）が高い作品ほどそのような要素を含んでいるからである。

読みとは本来が個人的な精神活動である。「教室」で読むことは時間と空間という制約をうけた不自然な読みであることを思い起すなら、Pickett（256—66）の指摘しているように「教室」での読みは intensive/analytic であるのが基本であるとも言えるだろう。（Fast Reading でも読み方を教えるだけであろう。）わざわざ分析可能な作品を選ぶということは避けねばならないし、理解度をどう測るのかといった評価に関わる問題も残るが、1の3でも述べたように、学生達の想像力、創造力を養うためにも文学作品（特に小説）を、その言葉に忠実に読むことの重要性を再認識する必要があるのではないだろうか。

（注）

1. 拙論「教室における小説の読みの方法について——アリス・ウォーカーの「日用品」についての文体論的読み方」、『十文字学園女子短期大学紀要第25号』1994：169—175、を参照。
2. Widdowson のこの著書を、教育的立場から有意義として紹介している例としては、（田中駿平：81）を参照。JACET 文学研究会のメンバーによって、1992～3年にかけて『英語教育』誌上に「文学教材の扱い方、新しい試み」のシリーズが掲載されていて、文体論の活用例もその中に含まれているが、どのような学科目で文学教材を扱うのかは明確になっていない。このシリーズについて詳しくは参考文献を参照。
3. 言語構造の差異の大きさが、かえって知的、分析的な作業をたやすくするという見解は、（渡辺：154）を参照。反対に、日本人が文法構造に拘わりすぎて、文字言語、文語、文法などを中心に英語を学んでしまうことが、「使えない英語」教育を生み出した元凶だとする立場については（小笠原：17—19）を参照。ただし、小笠原の場合は専ら、英語の運用能力を問題にしている指摘であるので、かつての平泉、渡辺論争のように、両者の見解の相違は視点の相違から生じていることにも注意しなくてはならない。
4. 英米文学を研究しながら英語を教える人が多いのは、文学を通じての教育方法がかなり昔に日本に入ってきたためであるという（川崎他：42—43）。
5. 『大学英語教科書目録』（大学英語教科書協会、1995）を見ると、1996年度の新刊テキスト約200冊中、小説、物語、詩歌、ドラマなど文学関連のものは、（retold や simplified を除くと）約15冊である。ただし、「作文」「文法」などは、本の内容が学科目を示唆しているが、この目録中「Reading」用のテキストには論説文が載っているのに対して、小説などは学科目が不明瞭である。従って小説類がどのような授業に用いられているかは判然としないが、たぶん従来の「講読」のようなものを念頭において出版されるのだろう。いずれにしても、文学作品のテキストの新刊は減ってきている。
6. そもそも、言語活動を主体とする「英語」の授業から文学作品が消えたのは、その素材の選択に誤りがあったのであり、文学作品そのものは、次のような理由で、英語の語学教材になりうるのだと Short と Candlin は述べている（90—92）。

○文学に用いられる英語も日常生活で用いるのと同じである。（Widdowson と同じ主張）

- 英語を外国語として学ぶ人達は、言語と文学の区別はしない。
- 文学作品は読む喜びを与える。
- 文学作品には変化に富んだ英語が見られる。
- 英語と英文学を同一の教師によって教わると、言語能力の養成から文学鑑賞への道がひらける。

又、教師用の研究書、Alan Duff & Alan Maley 著、*Literature* もいかに文学を「語学」の教材として生かせるかという見地から多くの例を示しているし、*The Whole Story* (Longman) や *The Web of Words* (Cambridge) などは、言語の運用能力と文学的理解の両面を調和させ、中級者以上を対象としたテキストとして市販されている。尚、先の注 2 に於いて言及した JACET のシリーズも、ほとんど言語の運用能力の側面からの紹介となっている。

7. 自らの見解が、Iser からの影響であるとして、小説を読む際には、何が (what) よりも、むしろどのように (how) 物語が語られてゆくに、読者は関わるのだということを、非文学的 (non-literary) なテキストとの比較をしながら説明している例としては、(Carter : 125) を参照のこと。(Leech & Short : 29) では読者が創造的にテキストの空白部分を埋めてゆくという指摘が見られる。
8. Pre-Reading 活動が、内容の難しい作品になるとそれ程効果がないということも、この点と関係しているかも知れない。
9. 文学教材を扱う場合には、言葉を教えるのか、あるいは文学自体に取り組むのか、どちらを中心にするのかを区別する必要があるという指摘は (田中英史, 1993 : 89) にも見られる。
10. この部分の筆者の論述は (Forster : Chap.4. People 及び chap.5. Plot) を主に参照している。
Tolstoy の手法については、(Uspensky : 41—43) に於いて、*War and Peace* からの引用と共に、作家と登場人物がいかに混合し影響しあっているかが実証されている。
11. Jespersen の名付けた Represented Speech が描出話法と訳されて日本に定着しているが、Quirk たちの使用した Free Indirect Speech (自由間接話法) も、これに該当するという注をつけている (村田 : 137)。
12. 調査した教科書のタイトルを順不同で挙げると、1. *New Harmony*, 2. *Genius English Readings*, 3. *New Cosmos Readings*, 4. *English 21 Read on!*, 5. *Sunshine Readings*, 6. *Racoon English Readings*, 7. *Treasure Land English Reading*, 8. *New Stage English Reading*, 9. *New Sunrise English Readers*, 10. *The Crown English Reading*, 11. *Mainstream Reading Course* で、5 が 1995 年の他は総て 1996 年出版。Reading Skill について特別に説明しているのは 1, 3, 4, 5, 11. adaptation でほとんどフィクションを載せているのは 7 で特殊な例であった。原文に近い形でフィクション (短篇小説) を扱っているものを挙げると、3 は Rapid Reading の中で I. Singer の “Ole and Trufa” を、英問英答による Comprehension や比喩について考えさせる設問と共に載せているし、1 では E. Hemingway の “Cat in the Rain” を読後に内容の要約文の穴埋めをさせるという設問と共に紹介している。後者では読み始める前に「ほとんど原文のままなので、丁寧に味わってみる」ことを生徒に勧め、短篇小説の世界に導入するために最初のパラグラフの内容を日本語で説明するなどの配慮が見られるが、文中に二ヶ所現れる FIT については、脚注で She thought that を補うようにと述べているにとどまっている。

参考文献

- Alderson, J. Charles. “Reading in a foreign language ; a reading problem or a language problem?”
Reading in a Foreign Language. Ed. J. Charles Alderson and A.H. Urquhart. London : Longman, 1994. 1—24.
- Brumfit, Christopher. “Reading Skills and the Study of Literature in a Foreign Language.”
Brumfit and Carter 184—190.

- Brumfit, Christopher J., and Ronald Carter, eds. *Literature and Language Teaching*. Oxford : OUP, 1986.
- Carter, Ronald. "Linguistic Models, Language, and Literariness ; Study strategies in the teaching of literature to foreign students." Brumfit and Carter 110—132.
- … "Directions in the teaching and study of English stylistics." Short 10—21.
- Cook, Guy. "Text, Extracts, and Stylistic Texture." Brumfit and Carter 150—166
- Duff, Alan and Alan Maley. *Literature*. Oxford ; OUP, 1991.
- Forster, Edward M. *Aspects of the Novel*, Ed. Oliver Stallybrass. 1962. Harmondsworth, Middlesex : Penguin, 1972.
- Fowler, Roger. *Linguistics and The Novel*. 1977. Reprinted with revisions. London : Methuen & Co. Ltd., 1983.
- Hutchinson, Tom. "Speech presentations in fiction with reference to *The Tiger Moth* by H.E. Bates." Short 120—145.
- Iser, Wolfgang. *The Act of Reading : A Theory of Aesthetic Response*. Baltimore : Johns Hopkins UP, 1981.
- Kazin, Alfred. *Writing Was Everything*. Cambridge, MA : Harvard UP, 1995.
- Kermode, Frank. *The Sense of an Ending—Studies in the Theory of Fiction*. 1967. New York : OUP, Paper, 1968.
- Leech, Geoffrey N. and Michael Short. *Style in fiction : A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. London : Longman, 1985.
- Littlewood, William T. "Literature in the School Foreign-Language Course." Brumfit and Carter 177—183.
- Long, Michael N. "A Feeling for Language : The multiple values of teaching literature." Brumfit and Carter 42—59.
- Pickett, G.D. "Reading Speed and Literature Teaching." Brumfit and Carter 262—281.
- Short, Mick, ed. *Reading, Analysing and Teaching Literature*. London : Longman, 1992.
- Short Michael H., and Christopher N. Candlin. "Teaching Study Skills for English Literature." Brumfit and Carter 89—109.
- Uspensky, Boris. *A Poetics of Composition : The Structure of the Artistic Text and Typology of a Compositional Form*. Trans. Valentina Zavarin and Susan Wittig. 1973. Berkeley, Los Angeles : Univ. of California Press, Paper, 1983.
- Widdowson, H.G. *Stylistics and the Teaching of Literature*. London : Longman, 1975.
- 青木健, 斎藤九一訳, ジョナサン・レイバン著, 『現代小説の方法』, 彩流社, 1988.
- 川口喬一編, 『文学の文化研究』, 研究社, 1995.
- 佐藤喬編, 『読み方の指導』, 英語教育ライブラリー, 第3巻, 開隆堂, 1976.
- 竹蓋幸生, 『日本人英語の科学—その現状と明日への展望』, 研究社, 1982.
- 田中英史, 田口孝夫訳, H.G. ウィドウソン著, 『文体論から文学へ—英語教育の方法』, 彩流社, 1989.
- 外山滋比古, 『近代読者論』, みすず書房, 1969.
- 平泉渉, 渡辺昇一, 『英語教育大論争』, 文春文庫, 文芸春秋社, 1995.
- 村田勇三郎, 「V. 話法 (narration)」, 『文 (II)』, 講座・学校英文法の基礎, 第8巻, 研究社, 1983, 133—160.
- 大学英語教育学会 (JACET) 内, 英語教育実態調査研究会編著, 『英語教育別冊 21世紀に向けての英語

- 教育』, 大修館書店, Jun. 1993.
- 伊佐治正浩, 「「読むこと」の指導において」, 『英語教育』, May 1993 : 8—10.
- 大谷泰照, 「「平泉・渡辺論争」とは何であったのか」, 『現代英語教育』, Nov. 1995 : 27—29.
- 小笠原林樹, 「日本人学習者に適した教授法ということ」, 『英語教育』, Jan. 1996 : 17—19.
- 桂邦彦, 「リーディングの教科書に望む」, 『英語教育 2 月増刊号』, Feb. 1993 : 42—43.
- 川崎寿彦他, 「座談会「文学研究—＜新＞VS.＜旧＞」, 『別冊英語青年 日本の英米文学研究—現況と課題』, Jun. 1984 : 30—45.
- 清川英男, 「リーダービリティと読書教材」, 『英語教育』, Dec. 1992 : 29—31.
- 塩澤利雄, 駒場利男, 「英語ⅡBの教科書について—リーダービリティを中心に—」, 『現代英語教育』, Feb. 1990 : 13—15.
- 静哲人, 「捨てきれない文法訳読法の生かし方」, 『英語教育』, Jan. 1996 : 26—28.
- 田口孝夫, 「文学教材の扱い方—新しい試み③英詩とパラフレーズ」, 『英語教育』, Jun. 1992 : 89. (以下, このシリーズからの記事は, 「」中の番号から後を記す)
- 同上, 「④ 英詩とハンズ＝オン・アプローチ」, 『英語教育』, Jul. 1992 : 98.
- 田中英史, 「⑤ 短篇小説の場合」, 『英語教育』, Aug. 1992 : 90.
- 同上, 「⑫ 文学教材の意義再考—結びとして」, 『英語教育』, Mar. 1993 : 89.
- 田中駿平, 「海外論考探訪41 文学教育の意義と方法」, 『英語教育』, Feb. 1982 : 81.
- 豊田昌倫, 「リーディング指導と文法」, 『英語教育』, Jul. 1989 : 16—17.
- 長岡政憲, 「⑧ Retold 版テキストの効用」, 『英語教育』, Nov. 1992 : 89.
- 藤井一吉, 「テキスト改作の問題点—読む楽しさを損なわないために」, 『現代英語教育』, May 1987 : 16—17.
- 松崎洋子, 「⑦ 長編小説の実践 : Anne Tyler の作品を用いて」, 『英語教育』, Oct. 1992 : 73.
- 谷田恵司, 「⑥ 長編小説を授業に」, 『英語教育』, Sept. 1992 : 89.
- 渡辺祥子, 「① 文学を利用した英語教育」, 『英語教育』, Apr. 1992 : 73.
- 同上, 「② 文学教材を用いたアクティビティ」, 『英語教育』, May 1992 : 73.